



民俗博物館だより

Vol. X XIV No. 2

1998. 1. 1



水をくむ用具 ▲

目 次

収蔵品展

「日々のくらしー水をめぐってー」について1

教材研究「山の民俗」ー郷土をいかに教えるかー3

お知らせ・編集後記7

収蔵品展

「日々の暮らしー水をめぐって」について

期間 平成10年1月6日～8月30日

大宮守人

□展覧会の要旨

今回の展示では、当館が収蔵する民具資料の中から日々の暮らしに関わる一昔前の水回りのものにスポットをあて、伝統的な暮らしぶりの特質と、急激な変容の足跡をたどりたいと思います。

日々の暮らしにおいて、水にまつわることはもっとも重要な環境要素のひとつです。つい一昔前までは、子どもの日課の第一は朝の水くみというところも珍しくはなかったのです。今と昔の暮らしのなかで、もっとも便利になったものとはという問いかけに対し、おばあさん方は「水道ができて、水くみがなくなったこと」とよくおっしゃいました。今日では、蛇口の後ろで、実は良水の確保のために様々な仕事があり、多くの人々がたずさわっていることを直接感ぜずに暮らすことが当たり前です。昔は、それらの事が集落ぐるみ、あるいは隣近所の共同作業であり、使用者が直接手を下して管理をしていたのです。特に奈良盆地の中央部などは、赤金気（鉄分の多い水）のところが多く、その濾過には、家ごとに水こしの設備をもっていました。直径45cm、深さ50cm程、下部前面に2.5cm程度の穴のあいた頑丈な陶器の器の中に、小石や砂、棕櫚の繊維、木炭などを入れて、汲んだ井戸水をそれにあげ、濾過して使っていました。どの水こしも、赤い鉄錆色がこびりついていることから、その水質の様子がしのべられます。



▲『大和名所図会（第二巻）』より（西川廉行氏所蔵）

こうしたくらしは、水道完備が常識となった今日では想像もつかないことになってきました。

昭和30年頃までは、都市部をのぞいて、井戸水を手押しポンプで汲み上げているところも多く、おいおい家庭用の電動井戸ポンプが普及していきましたが、その水は、この濾過装置を使って飲み水にしたのでした。

このような身近な水にまつわる生活用具から、稲作などの水利用具や田舟、避難用川舟、水越峠をめぐる江戸中期の河内と大和の水論資料（古文書、絵図、地模型等）の他、特別陳列として、「大和の国絵図」（江戸中期、5.7m×3.7m）や中世大和の莊園絵図（県指定文化財談山神社所蔵文書の内、一部近世も含む）など、当館が収蔵する民具資料を中心に紹介し、一部歴史資料等も含め、郷土の暮らしの変遷への理解を深めていただきたく企画いたしました。

□展示構成

①川漁用具

大和川沿岸などで使われた漁用具のいろいろ（投網、もんどり、簾、箱メガネ、瓶もんどり等）。川や水田、ため池などで取れる魚やタニシは貴重なタンパク源として、農村の人々も盛んに利用しました。

②飲料水と生活用具

井戸つるべ、井戸さらえ用具、みずがめ、柄杓などの台所用具、炊飯用具等、おもちゃ



▲ 二分子石（桜井市穴師）

(ミニチュア台所セット、水鉄砲)、生活用具(湯たんば、鉄瓶、台火鉢と銅子、水団扇、薬缶、杓薬缶、水筒、メンパ、風呂桶、たらい、耳たらい、手水鉢、手水たらい、足あらい、龍吐水、紙バケツ、防火用水桶)。

③水利慣行の民具

水まわりの社会生活にかかわる民具や歴史資料を通して現代にも生きる民俗文化を解説します。

水越峠水論資料、地模型、古文書等(江戸時代)、番水用香時計、つゆはり用具、水田の水管理用具(野つるべ、トユ、フリニガエ、木製ポンプ、スッポン、揚水用水車、田舟、他)。特に当館所蔵の水越峠水論資料は、古文書の他、絵図面や地模型なども伴うもので、元禄14年(1701)に京都所司代より判決がされた、水越峠の水利をめぐる、大和と河内間の水争いの一件資料で、結果は大和(現御所市吐田)の全面勝訴となったものです。

この一件に限らず、大和各地でも厳しい水争いの例は枚挙に暇がなく、大和の気風にも大きな影響を与え続けたものと思われます。

④郷土の景観資料(特別陳列)

前期(1/6~5/17)は、江戸時代中期に幕府の命令で、郡山藩と高取藩によって作成された、初公開の大絵図、大和の国絵図(県立奈良図書館蔵)によって大和の伝統的景観をご覧ください。あまりに大きなこの絵図は、文字などは詳細に読めませんが、この中に暮らした先人の労苦に思いをはせつつ未来への糧とする意味で一見の価値のある貴重な歴史資料です。

後期は(5/19~8/30)は、県指定文化財談山神社文書の内より中世荘園絵図(一部近世絵図)により村や河川の景観の移り変わりをご紹介します。

今日の風景と重ねて考えるとき、早くから開発の進んだ稲作農耕地域としての郷土の景観の意義を見いだす資料として貴重なものです。

なおこのコーナーは、前期、後期で展示品の入れ替えをいたします。

⑤避難用川舟(8.2×1.5m明治時代)

大和川沿岸の地域はかつては洪水の常習地帯であり、そのことを念頭においた暮らしの

あったことを解説します。集落の共有としてあるいは、自家用としてこのような舟を所有し、いざ洪水というときに、避難、救援用として使いました。

展示総点数 約60点

展覧会々期

平成10年1月6日(火)から

平成10年8月30日(日)まで

(月曜休館 但し、祝祭日・休日にあたる
場合その翌日に振り替え)

観覧料:

個人 大人200円 大・高生 150円

小人 70円

団体 150円 100円 50円

お問い合わせ先 奈良県立民俗博物館

(電話:0743-53-3171)

■ 開催期間中の催し等

・民俗博物館講座

(往復はがきで応募、定員60名 5月7日~5月20日必着)

テーマ 「奈良盆地の水とくらし」

講師 奈良大学名誉教授 野崎清孝氏

日時 平成10年5月31日 午後1時30分~

・ワークショップ

テーマ 「展示解説①」

当館主任学芸員 大宮守人

日時 平成10年2月7日 午後2時~

テーマ 「仕事着」

当館主任学芸員 徳田陽子

日時 平成10年3月8日 午後2時~

・特別陳列

「大和の国絵図」(県立奈良図書館所蔵)

期間 平成10年1月6日~5月17日

「中世大和の荘園絵図」(談山神社所蔵)

期間 平成10年5月19日~8月30日

教材研究「山の民俗」—郷土をいかに教えるか—

(平成9年度普及講座の報告)

浦西 勉・徳田陽子

平成9年度行った普及講座について、報告しておこうと思う。始めに普及講座の位置付けについて述べておくことにする。当館の活動は大きく次の3つに分けて行われている。

- (1) 民俗資料の調査・収集・整理・保管業務を行う。これがやはり民俗博物館の基本と考えている。
- (2) そして、収集した資料に関しての展示や研究会・講演会などの教育普及活動。この場合の「教育普及」ということは、様々に定義し、その方法を検討されるべきことと思われる。博物館にとって、その資料の活用方法として展示が重要な位置付けをなされていることは当然のこととして、その延長線上で、当館では講演会及び体験学習が行われている。なお、一昨年度から展示資料の解説を中心にワークショップという活動を始めている。また、民俗資料を学校や公民館の教育現場でどのように活用できるかというテーマで普及講座を開催している。(「奈良県立民俗博物館だより」通巻第73号を参照)
- (3) 民俗資料の収集・保存のための研究や民俗資料そのものの研究などを含めた広い意味での研究活動。

民俗資料そのものについての今日的考えの根底には、大きな社会の変化にともない、過去の生活用具や風俗習慣がなくなろうとするため、保存をしようという考えがある。また、民俗資料は、近代の人文科学、特に歴史学・国文学・宗教学などの幅広い研究分野に重要な意味を持って活用がなされてきている。このような考えの上に立って、収集された民俗資料の実物や研究の成果は、常に県民の文化向上や精神活動の充実のために費やさねばならないと考えている。では、どのような方法か。これがなかなか難しいのである。

民俗資料の調査・収集については、昭和49年(1974)の民俗博物館のオープン以来県民

の協力でかなり進んで、全国レベルでもその充実度はかなりのものという自負するものである。今、登録済みの民俗資料が約23,000点、収集点数が約38,000点まできている。ただ、これらの基本的な民俗資料の整理の作業が質量共に長期的な見通しで行動しなければならないのが現状である。だからといって、展示や講演会・研究会をずっと後回しにするわけにもいかず、この方面の活動を徐々に発展させて幅広い利用の道を開こうと考えるのである。民俗資料の収集及び整理を継続的に行いながら教育普及にも力を入れようとするために、より効果的で充実する内容を模索している途中である。そこで一昨年から行っていることは、

- (1) ワークショップ、つまり、学芸員の研究の成果を入館者との対話で成りたせる講座。(決して簡単ではないが、日常の業務の延長線上で行える。年5回程度行っている。)
- (2) 学校や生涯学習の現場の人々による当館を利用するための、より充実した方法の検討。当館の利用者が学校及び生涯学習の場としての活用が多いという点から考えて、民俗資料をどのように活用できるかを学校や生涯学習の指導者と一緒に考えようとする講座。民俗博物館から教師及び生涯学習に携わるリーダーに、民俗資料に関してのレクチャーする。このことによって、教育現場で指導される人々に方法やヒントや情報提供をすることによって幅広く学校教育や地域活動に利用されると考えている。これは普及講座として一昨年から行っている。

以上の(1)・(2)は、この2、3年、当館で行っている、いわゆる博物館の「教育普及」という立場からの事業である。あくまでも模索中であって、決定的な姿はなかなかできないが、現在、努力しているところであ

る。民俗資料という地味であるが身近な文化財を通して、「郷土の歴史や文化を認識し、考える場」としての博物館を模索し続けている。

ここでは、今年行った「普及講座」に関して概要を報告して、このことに対してのご意見・ご希望などを頂戴できたらと思う。

* * *

平成9年7月31日(木)の普及講座－郷土をいかに教えるか－「山の民俗」について。

今年は、当館のある大和民俗公園の里山という視点にたつて、山というものに対する人々の考え方、文化、民俗についてをテーマにし、資料(1)のとおり計画した。募集30名のところ、参加者32名をみた。資料(2)に示した通りの内容を検討してみた。これは、当日、講義で確認されたのであるが、山は幅広い私達の関心事であつて、深い文化的意味を持つテーマであるということであつた。以下、このテーマ目指したことについての概要を述べてゆくことにする。

1. 山とは(山の認識)

まず、何事も私達は自然の事実や明白な経験、人生の現実、そして伝統から思考を始めることにする。

山といつても、ヒマラヤ山脈のように雪をいただいた高く険しいものもあれば、100m以下の低くなだらかなものもあり、明確に定義することは難しいが、ここでは、山というのは奈良県下における1つ1つの山のことで、その山に関することを考えようとする。(資料(3)「奈良県下の山名一覧」参照)

昭和11年に出た『近畿の山と谷』(住友

山岳会)で奈良県の山を次の分類で紹介されたのが古い例であろう。

- 1) 中和の山々として生駒山とその付近、龍門岳とその付近、初瀬付近、榛原付近
- 2) 金剛・葛城山脈
- 3) 大峰山脈、奥高野
- 4) 大台ヶ原山脈

これら個別の山が大切な教材となる。

2. 山の自然

山の地質学、山の地理学、気候、山の動物と植物、植物相等の分野が存在する。

3. 山という対象それ自身、自然科学の研究分野であるが、人間と山との交渉となると、どのような研究分野になるのか。

まず、山は、その考え方によっては、人間と同じほど私達に与える問題は多い。ざつと思いつくまま、山と人間とのかかわりについてアトランダムに書き上げれば、山の信仰・登山・峠・狩人・狩猟・林業・林業儀礼・狩猟神・山の神・山村・たたら・抗

資料(1)

テーマ	教材研究 山の民俗－郷土をいかに教えるか－		
要旨	今日、山と積極的にふれあうという気分が高まっているように思われる。奈良県は、人間と自然との共生の姿としての歴史的景観を持ち続けている。「山」も例外でなく、代表的な歴史的景観の一つである。山は、人間の生活様式・思考・芸術などに大きな影響を与えてきた。歴史的景観としての「山」に関して、いろいろな分野の立場から講義を受けて、学校教育や生涯学習の場において「郷土をいかに教えるか」というテーマに取り組みたいと思います。		
日時	平成9年7月31日(木)	10:00～16:00	(9:30から受付)
場所	奈良県立民俗博物館 講義室		
内容	時間	演題	講師
	10:00～10:30	奈良県の山とその特色	当館主任学芸員 浦西 勉
	10:30～12:00	山の自然	奈良教育大学教授 北川 尚史
	13:00～14:00	山の信仰	奈良市立二名中学校教諭 松田 智弘
	14:00～15:00	山の文学・芸術	奈良市立水間小学校校長 中上 武二
	15:00～16:00	山のある景観と村落	奈良市立一条高等学校教諭 田中 嘉明
参加料	無料。ただし、入館料200円必要。		
対象	小・中・高校の教師及び生涯学習指導者		
定員	30名(先着順)		
主催	奈良県立民俗博物館 後援 奈良県教育委員会		

普及講座 山のテーマ(資料(2))

大テーマ	テーマ	資料(教材)	検討内容	
山	自然	植物 動物 地質	里山 高山 山の自然(植物)	
	民俗	信仰	役小角 修験道・山伏 吉野山・大峰信仰	山の信仰
		伝説 昔話	山の神 一本たたら 狼・熊・猪	山の文学芸術
	社会	山村	林業 焼き畑	山のある景観と村落
		登山	奈良県の山	個別の山について



夫・文化領域・猪除・山入り・焼き畑・共有山・入会・鉱業・鉱山儀礼・木地屋・平家谷・修験道・山男・山姥等々、つまり、山は豊富な文化内容を持っている。

4. 山に対する信仰

ひとときわ高くそびえ立つ山は、人々に新緑には心をなごませ、また、故郷の象徴としての親しみを感じさせる。しかし、厳冬や嵐の時には恐怖をおこさせ、人々に神秘性から畏敬の念をおこさせる。だから山に対する信仰は古代から存在したのであろう。奈良県では山岳宗教である修験道は中世から発達して独自の信仰を生んだ。

5. 山村についての概念

山地は一般的にみて人間の居住環境としては適していない。山に住む人々の仕事は平野の農業の仕事と違って、同じ結果を得るためにより多くの困難に耐え、より多くの努力をしなければならない。山の人々が平野に出たがるのも無理はないが、しかし、平野に出たがるのはほんの少数であって、大部分の者は生まれた山に執着する。それは、彼等はそこで生まれたからであり、両親がそこに住みついているからである。

山は人間の生活の舞台として一般に不適當といわれる。しかし、地下資源・森林資源・水力資源、さらに観光資源などの開発によって居住地となる場合もある。

以下、当日の講義の概要を当館でまとめたものである。

1. 里山の植生 北川尚史先生

人里の自然と植物をテーマに、植物学の立場から、基本的な自然、海拔の高さ、湿地か乾燥地かによる里山の諸相をわかりやすく解説して下さった。



▲ 講義風景（「里山の植生」北川先生）

人間と密接な白樫・椎・ソヨゴなどの大和民俗公園内にある植物のサンプルを手にとって説明して下さった。また、里山林は集落の背後にあり、人間が利用してきた林は畑の肥料・燃料等にしてきた時代から今日の変化について、自然植生の常緑樹林に人為的に働きかけると、どのような変化がおきるかなども解説して下さった。

2. 山の信仰—仙人と山— 松田智弘先生

山の中に住む仙人の多様な活動について解説をして下さった。特に、吉野という土地は、古代では仙人の住む山であると解釈された。日本では『抱朴子』（ほうぼくし。晋時代〔4世紀〕の道教の神仙の書）の影響があった。修験道の祖、役小角もそのような影響を受けていたと説明された。

3. 山の口承文芸—山姥・天狗・一本足などの昔話、伝説— 中上武二先生

山の人々が持つ昔話、山姥・天狗・一本足等を実際語ることを通して、その面白さとその話の中にあるイメージから、子供は深く様々なイメージを作ることができること。また、その昔話の背景まで解説してゆくと、地域の持つ文化や歴史を解明することができることを説明された。

4. 山のある景観と村落 田中嘉明先生

日本人にとって、山のある風景とは常識であると受け止められているが、世界的に見ると常識とはいえず、日本の特色といえる。しかし、現在これらの常識が変化しているため自然破壊などの環境問題が起きてきているのではないかという話をされた。

以上、貴重な講義をして下さった先生方に心から感謝申し上げます。これらの講義を何らかの形でまとめておきたいと思っている。

* * *

山の民俗（現地学習会）

—吉野山史蹟めぐりを通して—

本来、普及講座は現地を歩いたり、物を作ったりするという「経験」を通して郷土を学習しようとすることを主眼にしていた。そのため、準備する資料などに工夫をしたのだが、今回はまず山の持つ文化を幅広く知ってもらおうとしたので、4つの講義はすべて講義室

の層から読み取ってゆく。

また、ここは「吉野と桜」というイメージを定義し、培った場所である。このイメージを文人達がどのように心に移すのか。手段として、江戸時代の本居宣長の『菅笠日記』の目を借りる。

2. 日 時

1997年11月23日午前10時から午後4時頃まで。

最初の目的の青根ヶ峰は、時間的に無理であったが、だいたい、西行庵までこの時間で歩いた。参考のため、コースを下に示す。

3. 集合場所と集合時間

近鉄南大阪線終点 吉野駅 午前10時

4. コース

吉野駅→七曲を歩く→惣門（黒門）→銅鳥居→仁王門→蔵王堂→吉野建ての民家→東南院→勝手神社→喜蔵院→桜本坊→竹林院→世尊寺跡→水分神社→金峯神社→西行庵→金峯神社から惣門→ケーブル乗車→吉野駅

吉野山の紀行文・修験道・文化財ということを含頭において吉野山を歩いた。

1. 吉野山の紀行文

本居宣長の『菅笠日記』で歩いた道をそのまま歩いてみた。その他の文人の紀行文を借りて吉野山の解説を試みた。

『菅笠日記』はかなり詳しく吉野山の解説がなされており、これを読みながら歩くことによって様々な発見がある。当時は蔵王権現が三体見学できたが、今日は全く見る事ができない等々。

松尾芭蕉の2回の紀行文により、芭蕉の吉野山に対する精神的活動を、現地の風景と照らし合わせて見ながら学ぶことが多かった。

[参考として使用した資料]

- 1) 『菅笠日記』(本居宣長著、安永元年 [1772] 3月成) [『本居宣長全集』第18巻 (筑摩書房版)]
- 2) 『野ざらし紀行』(松尾芭蕉著、貞享2年 [1685] 4月) [岩波文庫『芭蕉紀行文集』]
- 3) 『笈の小文』(松尾芭蕉著、貞享4年 [1687] 10月から貞享5年4月まで。宝永6年 [1709] 刊行。) [岩波文庫

『芭蕉紀行文集』]

- 4) 『和州巡覧記』(貝原篤信 [益軒] 著、元禄9年 [1696] 成る。享保6年 [1721] 刊。) [『帝国文庫』第22編 紀行文集]
- 5) 『和州寺社記』寛文6年 (1666)
- 6) 『日本輿地通志 畿内部』(『大和志』並河永著、享保21年 [1736] 刊。) [『日本古典全集 五畿内志』中巻]

2. 修験道

吉野山は山岳信仰の中心であり、その解釈を試みるつもりであったが、これは役小角や蔵王権現などについての説明に終り、不十分であった。資料としてあげたのは次のとおり。

- 1) 『木葉衣』(行智著、天保3年 [1832])
- 2) 『踏雲録事』(行智著、天保7年 [1836]) [『続々群書類従』第十二宗教部]
- 3) 『修験心鑑鈔』(常円著、寛文12年 [1672] 刊) [『日本大蔵経 修験道章疏1巻』]

以上、現地の風土、文化史蹟をとおして、それぞれの事実を確認しつつ、民俗的解釈を加えていくことにおいて興味を深め、自主的に認識を深めて、教育現場に生かされていくものであると思う。

多くの先生方には、貴重なご意見をいただいたことに感謝申し上げます。当館では充分意義のあるものと思っているのだが、ここで反省もある。それは、当館の立場による解説が多くて、学校現場や生涯学習の現状を充分把握していないため、一方的であったかもしれないということである。そこでぜひ、教育現場、つまり教材研究、体験学習、環境教育、生涯学習という視点での希望を寄せていただければありがたいと思っています。

お知らせ・編集後記

- 1月6日から収蔵品展「日々のくらしー水をめぐってー」が始まります。当館の水にかかわる民具を出品します。また、古地図も出品します。ぜひ、ご覧ください。
- 当館も24年目の正月を迎えます。民俗資料を保存する収蔵庫の不足など問題が山積しています。またこの間、調査・収集で得た情報をどのように活用するかも大切な課題として考えて行きます。
- まだまだ、郷土を知るための大切な祭りや言い伝えが各地に残っています。正月の民俗から郷土の歴史を追体験できるものです。情報をお寄せください。